

群 教 セ	E 03 - 03
	平17.231集

# 保護者との連携を深める チーム援助組織の確立

——「ほっとルーム隊」による支援を通して——

特別研修員 小嶋 容子（渋川市立古巻小学校）

## 《 研究の概要 》

本研究は、児童が楽しく、安心して学校生活を送れるよう、学校と保護者が信頼関係を深めていくものである。そのため、校内で「ほっとルーム隊」を発足させ、保護者との相談にチームを組んで援助する。また、子育て支援セミナーを開いて学校と保護者が情報を交換したり、子育てへの不安を軽減したりする。これらにより、学校と保護者が共に学び、考え、活動し、連携を深めてきている。その結果、登校渋りも減ってきている。

**キーワード** 【教育相談 不登校予防 ほっとルーム隊 保護者 チーム援助 子育て支援】

### I 主題設定の理由

本校は深刻な不登校児童はいないが、登校を渋る児童は数名いる。また、学校生活の中で孤立気味であったり、不安を感じている児童もいるようであり、今後の動向が心配である。

本校の保護者は我が子のことに熱心であり、学校教育にも関心が高い。保護者同士のつながりは密であり、学校に関する情報交換も頻繁になされているようである。我が子の学校生活で不安なことがあると、学校に支援を求めてくる保護者は多い。これは、校内で保護者との相談が数多く行われていることから分かる。反面、学校の指導・支援に対して不信感をもってしまうと、信頼関係が崩れてしまうこともある。

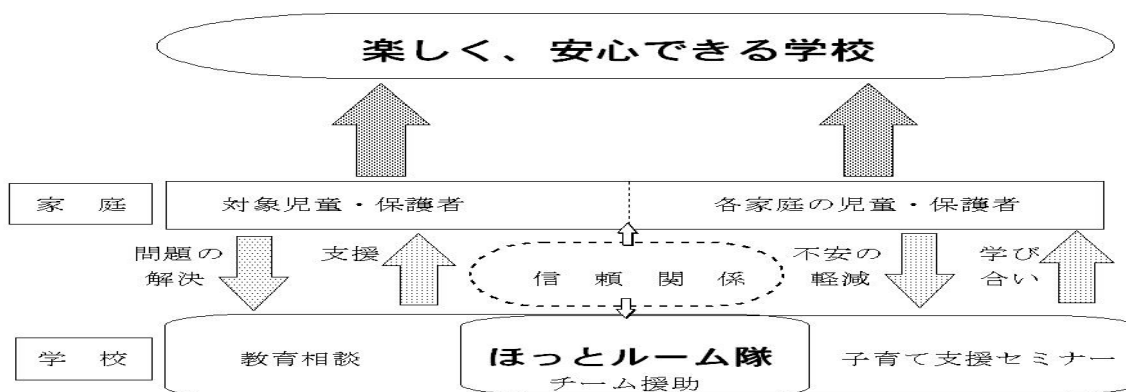
校務分掌における教育相談部は、教育相談主任・養護教諭・情緒学級担任・各学年1名ずつの計9人で構成されている。

相談への支援策を立て実践に当たるのは担任である。事例によっては学年主任、教育相談主任、管理職を交えてチーム援助的な相談体制を取り、担任が一人で抱え込まないようにしている。しかし、事前の話し合いや、次回の相談へ向けてのチームの編成・方針の決定、職員への情報提供などが組織的になされてはならず、学校全体での支援体制として確立し、機能させるという点ではまだ十分ではない。

そこで、教職員でチーム援助「ほっとルーム隊」を立ち上げ、保護者との相談に対して適切な支援体制を充実させていく。また、「子育て支援セミナー」を開くことによって、保護者同士・保護者と教職員の子どもへの共通理解を図り、信頼関係を築いていく。

これらの活動により、学校と保護者の連携が深まり、児童が楽しく安心して学校生活を送る基盤になるものと考え、本主題を設定した。

図1 研究の基本構想図



## II 研究のねらい

「ほっとルーム隊」の活動を通し、保護者と学校の連携が深まることで、児童が楽しく安心して学校生活を送ることをねらいとする。(図1)

- 保護者との相談に対して、援助シートを活用しながら組織的なチーム支援体制を整える。
- 懇談会において「子育て支援セミナー」を開催し、子育てについて共に考える場を提供する。

## III 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 「保護者との連携を深める」とは

学校の教育活動について保護者からの理解と協力が得られ、児童が安心して学べる環境が整っている状態を目指すことであると考え。そのためにチーム援助「ほっとルーム隊」を組織し、以下の実践を行っていく。

##### ア チーム援助による教育相談

チーム援助とは複数の援助者が、共通の目標をもって、役割分担をしながら援助に当たることと考える。保護者との相談のほとんどは担任が対応する。その相談内容を「相談報告書」の記入により、各担当学年の教育相談部員が把握する。これは行われた相談を学年内で理解していくためである。各学年の教育相談部員はその後、コーディネーターに報告する。必要がある場合はコーディネーターを中心に「ほっとルーム隊」を発足し、チ

ームを組んで保護者の悩みや問題の解決に当たる。

「ほっとルーム隊」が発足されると「チーム援助会議」を開き「ほっとルーム隊援助シート」を活用しながら情報交換や援助方針、具体的な援助案などを練っていく。そして援助者がそれぞれの立場でそれぞれの力を活用しながら援助を行う。(図2)

##### イ 「子育て支援セミナー」の開催

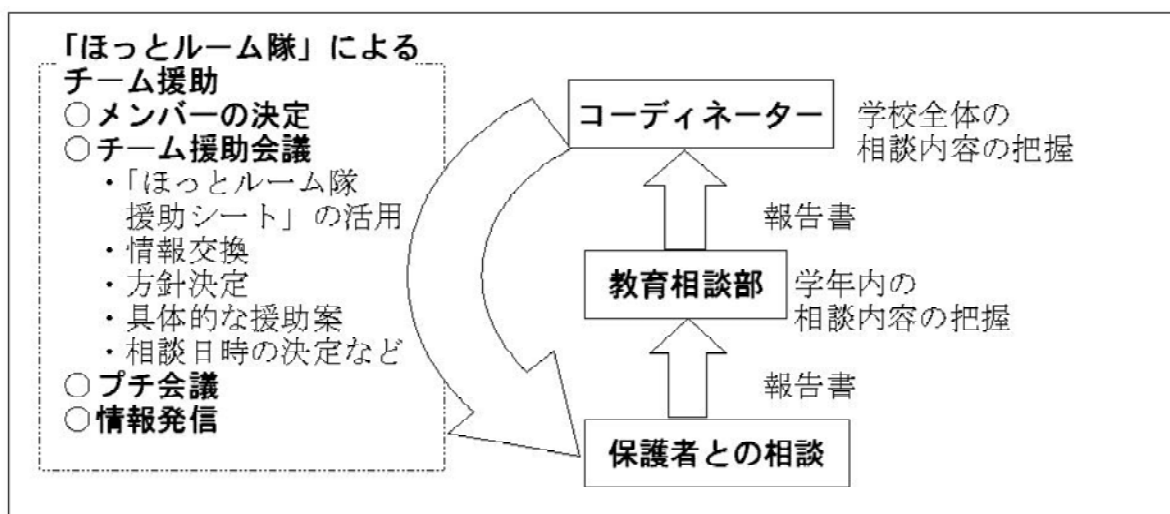
「子育て支援セミナー」とは、子どものかかわり方を学校と保護者が一緒に考え、学ぶ場である。保護者に子育ての悩みや不安に思うことをアンケートで調査をし、その結果をもとにプログラムを作成していく。プログラムの実践によって、保護者と学校の信頼関係が深まり、その結果子どもが安心して学校生活を送ることができ、不登校の予防につながると考える。

#### (2) 「ほっとルーム隊」とは

保護者とのかかわりの中でチームでの援助が必要であると判断されたとき発足されるのが「ほっとルーム隊」である。

「ほっとルーム隊」の活動は、保護者との相談に対してのチーム援助と子育て支援によるチーム援助である。これらにより、問題の解決を目指していくが、同時に職員間の共通理解を図り、校内での協力体制を強めていくことも目標のひとつである。また、必要に応じて外部団体との連携も考えていきたい。

図2 教育相談部の機能



## V 実践計画

「ほっとルーム隊」での活動を「教育相談」と「子育て支援セミナー」に分けて計画を立てた。

ほっとルーム隊		
月	教育相談	子育て支援セミナー
6	○教育相談部会・職員研修 ・ほっとルームの新設についての提案	○第1回プチ子育て支援セミナーの準備 ・保護者を対象に子育てについての悩みアンケートを実施。 ・学級通信で保護者への参加を呼びかける。 ○第1回プチ子育て支援セミナー開催 ・参加者の感想・意見の集約
7 8	○ほっとルームの新設・環境整備 ・職員作業にて、相談室としてリラックスできる環境を整えていく。 ○教育相談部会 ・「ほっとルーム隊」の組織づくりとチーム援助の方法について話し合う。 ○職員研修 ・職員を対象に「ほっとルーム」の活用についてのアンケートを実施する。 ・校内研修で「ほっとルーム隊」の共通理解を図る。	○第1回子育て支援セミナーだより発行
9	○チーム援助での教育相談開始	○第2回子育て支援セミナー準備
10	○教育相談部会 ・チーム援助の実施について、改善点を話し合う。	○第2回子育て支援セミナー開催 ・参加保護者の感想・意見の集約
11		○第2回子育て支援セミナーだより発行 ○第3回子育て支援セミナー準備
12 1	○保護者の変容 ・学校評価のデータを収集し、学校に対する意識の変容を検証する。	○第3回子育て支援セミナー

## VI 実践の概要と考察

### 1 チーム援助

#### (1) チーム援助についての組織づくり

##### ア 本校の課題

夏休みに教育相談部会を開き、チーム援助について話し合った。その結果、情報が隔々まで行き届かないことが大規模校である本校の課題であることを確認した。保護者との相談も内容が分かっているならば、他の職員が早い段階で協力することができる場合もあり、担任や担当が一人で抱え込み、悩むこともなくなる。学年内でさえ情報が行き届かず、問題が分からないことがある、ということが課題として把握された。

##### イ 相談報告書

各学年の教育相談部員が自分の学年で行われた相談について、担当者から記入してもらった「相談報告書」を通して把握する。それを教育相談主任（コーディネーター）に報告し、コーディネーターは学校全体の相談について内容を把握する。そして、チーム援助が必要であれば「ほっとルー

ム隊」を発足させ支援を行っていく。

##### ウ 援助シート（資料1）

「ほっとルーム隊」発足後、援助会議では「援助シート」を活用する。援助シートの項目は、負担をかけることなく、ある程度自由に記入できるように工夫をした。そして、裏面にその後の様子や気付いたことを記入し、次年度に引き継げるようにした。

##### エ 情報発信

大規模校の欠点を補う工夫として、ほっとルーム隊発足後、コーディネーターが職員会議や朝会で経過報告を細かく行う。情報発信をしていくことで職員の共通理解を図り、多方面からの援助を得やすくしていく。

##### オ プチ会議

チーム援助会議を綿密に行いたいのが、実情として全メンバーがそろそろ日時を設定するのはなかなか難しい。全メンバーが集まり何度も会議を行っている、ほっとルーム隊が動き出し、効果的な機能を発揮するのにかなり時間がかかってしまう。そこで、基本的な事を決定する会議はメンバ

一全員が集まることとし、そのほか細かい部分の話合いは、必要なメンバーがそろった時点で、職員室のサロンなど集まりやすい場所を使って「プチ会議」を開く。この「プチ会議」によって、大規模校においても機を逸することなく素早く対応でき、ほっとルーム隊の効果的な活動につながると考えた。

### 資料1 ほっとルーム隊援助シート

ほっとルーム隊 援助シート		古善小学校教育相談部
児童氏名		援助開始日
年 組		月 日
保護者氏名(続柄)		担任氏名
問題の概要		
援助が必要なところ		
今までに行った援助		
目標と援助方針		
具体的な援助 だれが何を行うか いつからいつまで行うか など		

#### (2) チーム援助の事例

実際に保護者の相談に対してチームで援助した事例は3件あった。そのうち1件は子どもの発達にかかわる相談で、担任・管理職・養護教諭・特学担当でチームを組んで支援をした。担任が中心となって何度もプチ会議が開かれ、方針をしっかりと定めて臨んだため効果的な援助ができた。対象児童には個別指導が必要であることが確認され、その後特学担当の援助が大きく貢献し、保護者との信頼関係も良好である。さらに相談が進むにつれ、総合教育センターの相談にも来所するなど外部との連携も見られた。

#### (3) チーム援助から見てきたもの

保護者が援助を求めて相談に来校する場合、不安や悩み、焦りを感じていることが多く、表情も硬く、気持ちにも余裕のない状態である。

ところが、学校側がチームを組んで相談に当たり、多方面から話合いが進んでいくと、保護者も

安心して話すようになってくる。相談内容は子どものことであるが、保護者自身が自分を振り返り、解決策に気付くこともある。さらに信頼が深まると保護者の表情も柔和になり、「我が子がとても落ち着いて学校生活を送れるようになった。私(母親)も安心して子どもを送り出せます。」と笑顔で話す姿も見られた。

よって、チームを組んでの多方面からの援助は、学校と保護者の信頼関係を深めたと考えられる。

一方学校側では、保護者との相談が行われたときに、チーム援助が必要かどうか考えるようになり、援助・協力をしてもらえるという点で担任にとって心強いという声が聞かれた。また、「ほっとルーム隊」が発足され、チーム援助による相談の過程を報告することによって、他の職員から労いの言葉やアドバイス、自分もこういった点で協力できそうだという提案があり、これらのことが当事者にとってチーム援助を進めていく上での原動力にもなったようである。

大規模校の特徴として他学年の様子や活動が見えにくいということがあったが、チームを組んで対応していくことが共通理解されたことにより、今までの学年を単位として活動するという枠が広がっていった。その結果、他学年の担当者から協力をしてもらうことにためらいを感じていた職員も声をかけやすくなり、自分が手を出してよいのかどうかと一歩引いていた職員は協力がしやすくなったという声があった。

さらに、必要に応じてプチ会議を開いていくことにより会議の負担も減り、意思の伝達・交換が気軽にできるようになった。

よって、「ほっとルーム隊」によるチーム援助体制を確立したことは教職員の意識を変え、協力体制を強めることにもつながったと考えられる。

## 2 子育て支援セミナー

### (1) 第1回 プチ子育て支援セミナー

1学期に懇談会の時間を利用して「プチ子育て支援セミナー」を開催した。時間の関係上、30分程度の実践となった。本校では子育て支援セミナーの実践ははじめてであり、保護者の関心も高かったのか、普段の学級懇談会より参加率がよかった(28名中20名参加)。

事前に保護者向けにアンケートを行ったところ、「ゲームと家庭学習の時間について悩んでいる」「上手なしかり方について皆さんの意見を聞

きたい」「どのような声かけをしたら子どもの励みになるのか」などの回答が多かった。そこで「子どもにやる気を起こさせるには」をテーマにし、学級だよりでセミナーの開催の呼びかけをした。セミナー当日は職員チーム（ほっとルーム隊）による、「ゲームばかりしてなかなか宿題を始めない子どもを母親がいらいらしながらしかる場面」の寸劇を行った。そのあと、4, 5人のグループに分かれ、寸劇からのいくつかの投げかけについて話し合った。普段子育ての中で考えていることや悩んでいること、我が家での実践、失敗談などもでて活発な話し合いが行われた。

#### 保護者の感想

- ・ 普段話をする機会のなかった人と触れ合えてよかった。
- ・ みんな同じような悩みをもっていることが分かりました。
- ・ 子育てに王道はないことを改めて感じた。
- ・ 今までの受け身の懇談会よりよかった。
- ・ また、このようなセミナーを開いて下さい。

### (2) 第2回 子育て支援セミナー

保護者の要望に応え、2学期の自由参観に「第2回子育て支援セミナー」を開催した。親子で粘土制作を行うことを保護者に知らせ出欠をとったところ全員参加であった（28名中28名参加）。そこで「家族で行ってみたいところ」を親子で相談しながら作っていくというプログラムで行った。このプログラムは、親子でテーマに沿って具体的なものをイメージ化し、それを共有する活動を通して、創作の過程で相互コミュニケーションの促進や気づきが期待できるものである。

セミナーでは、アイスブレイキングを行った後、家族で行ってみたいところを決め、親子で何を作るか話し合った。十分に話し合いをし、作業に入った。途中で親子別々に集まり、シェアリングを行った。再び親子で作業に戻り制作をした後、活動の振り返りとまとめを行った。

作品が時間内に完成できず、家に帰ってから家族を交え、続きを制作した児童が12人いた。

#### 子どもの感想

- ・ お母さんに「うまい」と言われてよかった。
- ・ お母さんが怒っても楽しかった。
- ・ お母さんと遊んだことがなかったのでうれしかった。
- ・ 粘土でハワイを作ったら難しかったけどお

母さんと一緒に相談した。

#### 保護者の感想

- ・ 今回のように小さな机のそばに二人で体を近づけて座ったことで子どもの体温を感じながら、気持ちも近づけることができました。
- ・ 何を作りたいかの答えを聞いたとき、少し子どもの心が見えた気がします。
- ・ 子どもに逆に「お母さん上手だね」と言われてしまいました。少し恥ずかしくなりました。私もほめてあげればよかったと反省です。
- ・ 弟が生まれてから久しぶりに抱っこをしました。子どもの体の重みと心の寂しさを感じました。
- ・ 家族を作ってゆくという大切さを粘土で教えていただきました。ただ聞くだけのセミナーよりはるかに身に染み入りました。参観ではなく、参加できるセミナーをまたぜひ企画していただきたいです。
- ・ セミナーの内容もよかったのですが、他のお母さん方の対応や言動が大変参考になりました。
- ・ 子どものことだけを考えられる、とてもよい時間をありがとうございました。
- ・ 学校の先生だけでなく他の機関にも、私たち親子を見守って下さる方々がいるということを感じ、心強く思いました。
- ・ 仕事を休んで参加して本当によかったです。先生方に感謝します。ありがとうございました。

### (3) 子育て支援セミナーから見えてきたもの

1学期に行った第1回、2学期に行った第2回の子育て支援セミナーを通して、保護者の学校に対する関心の高さを改めて感じた。「子育て支援セミナー」という聞き慣れない行事に、初めは保護者も緊張していたようだったが、ほかの参加者と話し合ったり、親子で粘土制作をしたりと、楽しく参加できたようである。開催してみて保護者はこのような機会を望んでいたということが分かった（保護者の感想から）。このセミナーを通して、保護者は子どもとの接し方を見直し、気付くことができたようである。また、子育てに戸惑い

を感じている保護者は、他の参加者の考え方や接し方を知ることができ、よい刺激となったようである。

保護者の感想を見てみると、1回目は当たり障りのない言葉で書かれていたが、2回目のセミナーでは、思いがとても素直に表現されていることから、保護者が徐々に心を開いてきているのではないかと考える。

また、このように一緒に学び、考えていく場を提供したことについて「ありがとうございます」という感謝の気持ちが表れてきていることから信頼が深まってきたのではないかとと思われる。

このセミナーで子育てについての悩みや戸惑いを少しでも軽減する支援ができたことは、保護者の安心感と信頼を深めていくことに効果的であったと思う。

また、今回は校内の事情もありクラス単位の実践になったが、モデルケースとして全職員へ発信したことは、今後、保護者への子育て支援を考える際の指標になったのではないかと考える。

### 3 「子育て支援セミナー」と「チーム援助」のかかわり

学校側から考えてみると「子育て支援セミナー」は発信するものであり、教育相談における「チーム援助」は受け入れるものである。保護者の立場から見ると逆になる。これら発信者と受信者が「子どもをよりよくしたい」「楽しい学校生活を送らせたい」と共通の思いであることが、伝わっていた事例を下記に考察してみる。

ある保護者は自分の子育てについて悩んでいた。そこでクラス全体を対象に子育て支援セミナーを開き、子どもへの接し方について考える場を提供した。ほかの参加者の子育ての様子が分かり、大変参考になったようである。また、個別の支援として、担任・教頭・音楽専科でチームを組み、母親への相談や児童への指導・声かけを行っていた。この保護者の子育てへの悩みはすべて解消したわけではないが、年度当初の焦りのようなものは感じなくなり、「直進でゴールに突き進むのではなく、弧を描くようにゴールに向かうこともあっていいと思う」と話すようになった。児童も気持ちが安定し、登校を渋ることもなくなってきている。これは保護者が、我が子や自分の悩みについて、学校は前向きに取り組んでいると感じているため、不安が軽減され心が安定してきたので

はないかと考えられる。

この事例では、教育相談による個人的で、問題に対してダイレクトな援助と、子育て支援セミナーによる間接的ではあるが、自分を振り返りじっくり考えることができる援助が相互に作用し、効果的だったと言える。

この二つの実践を通して、学校側から保護者の気持ちに寄り添い、理解を深めようとするはたらきがあれば、学校と保護者が良好な関係を保ちながら連携することはそう困難ではないということが分かった。

### V まとめと今後の課題

- 本研究では、今まで部分的に行われてきたチーム援助を組織化し、確立した。複数の職員が多方面から援助をしようとする姿勢が、学校に支援を求めてくる保護者に安心感を与え、相談が進むにつれ相互に信頼感を増したようだ。チーム援助を通して職員間の協力体制も強まってきたように思う。
- 今回いくつかあった事例は学校だけでは対応しきれず、外部機関と連絡を取り合い連携した。今後もこのような事例が増えていくことが予想される中、必要があったときに機敏に動けるよう外部機関とのパイプを整備していくことが課題である。
- 情報を発信することが大規模校でいかに重要かを痛感した。気軽に情報を伝え合える職場の雰囲気が大切であることも分かった。これからも職員間の共通理解を図り、担任が一人で抱え込むことがないように、周りからの協力体制をさらに強めていきたい。
- 本研究の検証として学校評価を活用し、保護者の学校に対する思いを確かめ、今後の改善点を探していきたい。
- 今回はクラス単位で行った子育て支援セミナーをPTA行事や学年行事として、年間計画の中に取り入れて深めていきたい。

### 〈主な参考文献〉

- ・石隈 利紀・田村 節子 著  
『チーム援助入門』 図書文化出版（2003）

（担当指導主事 武藤 榮一）